

「怠惰に寄せるオード」考

——身体性の優位

穴吹 章子

要 旨

1819年にキーツ（John Keats, 1795-1821）が書きたいわゆる五大オードのうち、比較的評価の低い「怠惰に寄せるオード」を取り上げて、賞賛されている怠惰の意義を論じて、このオードの重要性を考察した。詩人にとって大事な価値をもつはずの「野心」と「愛」と「詩心」とが退けられて、それ以上に「怠惰」が賞賛される理由を、題辞に用いられた『マタイ伝』6：28と『ルカ伝』12：27の解釈や、トムソン（James Thomson, 1700-48）などが賞賛した怠惰との比較を通じて考察した。キーツの怠惰は、野心や愛や詩心についてのさまざまな思い悩みから解放してくれるだけでなく、身体的な回復をもたらし、さらには生のはかなさや短さを気づかせ、それを味わわせる力も有していると論じ、このオードの再評価を試みた。

キーワード：キーツ、怠惰、勤労、身体、『マタイ伝』

1. はじめに

キーツ (John Keats, 1795-1821) が1819年の3月中旬から6月初旬の間に書いた「怠惰に寄せるオード」(‘Ode on Indolence’) は、同時期に書かれたいわゆる偉大なオード群¹⁾と比べると、伝記的なことがより大きく反映した作品であると考えられていて、その評価は必ずしもよいとは言えない。たとえば、キーツの伝記を書いたベイツはこのオードについて、ほぼ同じ時期に書かれたオード群の基準には達せず、その価値は主として伝記的なものだとして評している²⁾。また、オーバーは、使用したアヘンの影響下に書かれたものだろうと解している³⁾。

キーツ自身もこの詩を『1820年の詩集』⁴⁾に入れず、この詩が出版されたのは死後の1848年のことだったので、自詩への評価もそれほど良くなかったのかもしれない。

しかし、このオードについてのキーツ自身の評価は当初それほど悪いものではなかったようである。これが書かれる契機を記した弟ジョージ夫妻宛の手紙(1819年3月19日付)において、キーツは「一種の怠惰で極めてのんきな気分」⁵⁾について記していて、“This is the only happiness; and is a rare instance of advantage in the body overpowering the Mind.”(「これは二つとない幸福だ、精神を圧倒する身体における利点の珍しい例だ」II. 79)と、詩のテーマでもある怠惰な精神状態を肯定している。さらに、同年6月9日付のジェフリー嬢宛の手紙⁶⁾では、今年になって一番楽しかったことは「怠惰に寄せるオード」を書いたことであると語っていることなどからも、自詩へのよい評価の一端が伺えるからである。またモーションは、この詩のテーマは活力に乏しいが好奇心と想像力を表していると見なし⁷⁾、外界から得たイメージというよりも詩人としての自己の内につくり出したイメージを描いた詩であると好意的に評価しようとしている⁸⁾。

本稿では、この詩が書かれた契機を考察しながら、そのときの詩は内面を描いたものである以上に、怠惰のもつ力についてのキーツの理解を示すものである点と、またそれが今日的意味も有している点を明らかにしたい。

2. オードの問題提起

このオードは一見不可解で理解しにくい内容を含んでいるように思われる。最終連で次のようにキーツが退ける三つの幻影(“ye Phantoms”⁹⁾)は、彼にとっては重要な価値をもつはずの「愛」(“Love”, 1. 25)と「野心」(“Ambition”, 1. 26)と「詩的想像力」(“Poesy”, 1. 30)であったからである。第一に、それらを退けて「怠惰」を称揚している点がわかりにくい。

Vanish, ye Phantoms, from my idle sprite

Into the clouds, and never more return!

消えろ、幻影よ、私の怠惰な精神から

雲の中へと、二度と戻るな。(II. 59-60)

前年の11月に出会い秘密裡に婚約¹⁰⁾することになるファニー (Fanny Brawne, 1800-1865) や家族への「愛」、立派な詩を書いて詩人として認められたいというような「野心」、詩を書かずにはおれない詩人の魂ともいべき「詩的想像力」は詩人にとってきわめて重要なはずである。キーツにとって社会人として家庭人として詩人としての自己表現を求めるものだからである。

しかしこれらの求めるところを退けて、「怠惰」を称揚している。あたかも社会的に活躍できる健康的な心身を憧れるのではなく、いわば虚弱で社会的にも無力なまままでいることを奨励しているかのようである¹¹⁾。

ところで、なぜキーツにとって重要なはずの愛や野心や詩心が彼を衝き動かすほどの力を持たないのだろうか。なぜここで「怠惰」がこのように賞賛され得るのだろうかという疑問が生じる。この疑問を解くために「怠惰」が当時どのように受け止められていたかを整理しておきたい。

3. キリスト教文化における怠惰

ここでオードの題辭 “They toil not, neither do they spin.” に注目すると、「彼らは働かず紡がない」と言っているので、時代背景を考慮に入れると、たとえばイギリスの産業革命の牽引力の一つだった当時の紡績・織布業に携わる労働者の運動への言及と見なすことができるかもしれない。1811-17年ごろに、イングランド

中部・北部の紡績・織布業に携わる労働者が機械を破壊するというラッタダイト運動を起こしていたこととの関連が思い起こさせるからである。

しかし、この題辞は『マタイ伝』6:28¹²⁾と『ルカ伝』12:27¹³⁾からのもので、“They”は労働者ではなく野の花を指す。だからこれを労働運動の言及として解釈するには無理があるだろう。キーツが賞賛している怠惰は、産業革命期の工場労働者の行為とは直接的に関連するわけではないのである。

聖書の解釈では¹⁴⁾、この一節は働かないことを勧めるのではなく、神から与えられる存在や滋養や芳香や美しさなどの恵みを説くものだと考えられている。

労働運動との関連は別にして、キーツが用いた題辞が「怠惰」を称えていると考えるなら、別の疑問が生まれる。キリスト教文化では、「怠惰」は七つの恐るべき罪である罪源（高慢、どん欲、邪淫、しと、どん食、怒り、怠惰¹⁵⁾）の一つとされているので、キリスト教文化において罪とされる怠惰を、キーツはなぜ称賛するのだろうかという疑問である。

聖書において「働きたくない者は食べてはならない」（『テサロニケ信徒への手紙2』3:10）や「自分で得たパンを食べるように、落ち着いて仕事をしなさい。」（同書、3:12）と、労働の価値は非常に尊ばれている。これに対して、怠惰は精神的に価値あるものに反しているので罪とされている。「あることまたはものを避けたいと願うのは、それが自分の利益をおびやかすものであって、したがってそれを悲しむか、それと戦う必要があると思うことから生じる。こうして、精神的に価値のあるものは身体の快楽や快適さに反すると考え、精神的な価値に対する怠惰や倦怠が生まれる。」¹⁶⁾ 怠惰は身体の快楽や快適さと結びつけられ、罪の一つとされてきたのである。

またダンテ（Dante Alighieri, 1265-1321）は『神曲』（1307-21）の「煉獄篇」第18・19歌で、怠惰のうちに日々を過ごした者が罪の償いとして、勤勉な人を称え怠惰な人を非難しながら煉獄山の第4の還道をひたすら走る場面を描いていた。バートン（Robert Burton, 1577-1640）も『憂鬱の解剖』（*The Anatomy of Melancholy*, 1621）において、怠惰が七つの罪源のひとつであり、憂鬱などの多くの病気を引き起こす¹⁷⁾と述べていた。

さらに当時は怠惰と対比される勤勉の価値の方がより尊ばれるようになっていた点も看過できない。たとえばホガース（William Hogarth, 1697-1764）の12点連作の版画集『勤勉と怠惰』（*Industry and Idleness*, 1747）は中産階級の意識向上を目ざすもので、時流に適した内容であると企業家からも高く評価されて大いに人気があったという。この版画集は、当時の新興産業の一つである紡績工場に見習い工として入職した「勤勉」（フランク・グッドチャイルド：Frank Goodchild）と「怠惰」（トム・アイドル：Tom Idle）のそれぞれの人生を描いたもので、勤勉なフランクがロンドン市長にまで上り詰めるのに対して、快楽におぼれた怠惰なトムは公開処刑の死刑に終わるというものである。当時の労働者の識字率が低かったので、このような物語を教訓的に絵解きにしたものがよく読まれたということだが、生産活動の機械化・動力化、工場制の普及などによる産業革命を迎えた時代において「勤勉」の価値がより称揚されるようになっていたのである。

ところで、オードの題辞が得られた『マタイ伝』には前段がある。これを導く一節の「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか」（6:25）を思い起こすと、題辞に相当する箇所は、身体の怠惰の称揚であると言い難い。橋本滋男は『マタイ伝』のこの箇所に関して次のように解説している。

神の前にいわば手ぶらで生きることを教える。そのような生き方が可能となるのは、神は空の鳥や野の花にまさって人間に配慮しておられるという神への信頼においてである。……人に衣食が必要であれば、神はそれを与えて下さるはずである。逆に言えば、もし神が命も衣食も与えて下さらなければ、もうそれは必要がないということになる。これは神への恐ろしいほどの徹底的な信頼に基づく教えである。しかし決して働くことについて怠惰を勧めているのではなく、《思い悩み》——それは自力への信頼と結びついて——からの解放である。……《思い悩み》からの解放は大きな気楽さを生むであろう。しかし実際には厳しい生活となる。¹⁸⁾

こうして見てみると、上記の題辞は『マタイ伝』では

怠惰の奨励ではなく、思い悩みからの解放を導くものとして示されていることになる。このことから『マタイ伝』と『ルカ伝』との関連において次のことが考えられる。キーツのキリスト教信仰についてここでは問わないが、「怠惰」は「愛」や「野心」や「詩的想像力」について思い悩むことから解放し、さらには身体や命の重要性を改めて思い起こさせるものであると考えられよう。

4. 怠惰の意義

身体の快楽や快適さと結びつけられ、罪源の一つである怠惰が、思い悩みからの解放をもたらす力を有するものであると同時に、精神的価値に対する身体的重要性・優位性を称揚している点を、さらに次の3点からもその意義を考察したい。1) 身体性への関心、2) キーツが見出した怠惰の意義、3) 身体性へ重点の置き方における怠惰の今日的意義、の3点から考察する。

1) 身体性への関心

このオードを書いたころキーツはすでに結核に感染していて、その後一年余りで転地療養先のローマで病死することになる。すでに結核の症状が出ていたこと¹⁹⁾とは別に、キーツは当時の自分の身体の状態の一端をこのオードと手紙の両方で描いている。

第2連は怠惰を次のように身体的な側面から描く。

Was it a silent deep-disguised plot
To steal away, and leave without a task
My idle days? Ripe was the drowsy hour;
The blissful cloud of summer indolence
Benumbed my eyes; my pulse grew less and less;
Pain had no sting, and pleasure's wreath no flower:
こっそり立ち去り、私の怠惰な日々を変えもせず
仕事をする気も起こさせず、立ち去ったのは
静かで深く企んだ陰謀なのか? 眠気を催す時が熟した。
夏の怠惰の恵み深い雲が
両目を鈍らせ、脈拍がだんだん少なくなり、
痛みにとげはなく、快楽の花輪には花もなかった。

(ll. 15-18)

眠気に襲われ目もぼんやりとし、脈拍数も減少し、さ

らに苦痛すら痛みを伴わず、快楽にも盛りがなくその激しさが感じられないという。このような状態は肺結核の症状²⁰⁾の一つである倦怠感を彷彿させる。

脈拍数の減少は睡眠時にも表れることがあるが、この減少によって意識が消失し、脳貧血のような失神発作を起こすことがある。逆に言えば、失神しそうになる身体の状態をキーツは描いているのである。その身体症状の一つの現れが脈拍数の減少であり、苦痛や快楽を感じる諸感覚の鈍磨なのである。さらに、このような身体的精神的無為の状態は、今日的には、感受性・感情・関心などの欠如を特徴とする「抑うつ」(depression)や「意欲低下」や「意識低下」(apathy)²¹⁾も疑われるところでもあろう。

だが、このような症状は頭部への外傷や脳に障害を受けた後²²⁾にも表れる同様の症状の一つではないかと疑われることも忘れてはならない²³⁾。

このオードを創作した経緯を記した手紙(1819年3月19日付)において、オードで描かれたような怠惰な気分が、それをもたらした事情とともに少し詳しく説明されていた。キーツはまさしく顔面に外傷を受けていたのだった。前日の18日に友人ブラウン(Charles Armitage Brown, 1787-1842)と初めてクリケットをしにいき、そこで目に黒あざをつくってしまったからだという²⁴⁾。

上記の手紙や詩で描かれた、何もする気が起きない怠惰な気分に見舞われたのは、それが顔面に打撃を受けた翌日であり、しかもそれが辛い経験とならなかったからだという。この手紙は、友人ブラウンとキーツがクリケットをしたときに球が目にあたった翌日に書かれたものである。ブラウンがキーツの脛に蛭²⁵⁾を当てて応急処置をしたおかげで炎症は治まったのだが、朝起きると目に黒あざができ、怠惰でのんきな気分になっていたというのである。事故直後には身体的痛みだけでなく精神的痛み(たとえば後遺症への不安)などを経験していたかもしれないであろうが、一晩寝るとそのような痛みが軽減している様子がうかがえる。

このような痛みの消失に関する具体的な状況について手紙でさらに説明を加えている²⁶⁾。身体的にも精神的にも無為の状態であり、どのような意欲もわからず、快楽も苦痛も感じない状態となっているという。そしてこの

状態をキーツは全面肯定し、つかの間の「二つとない幸福」(Ⅱ. 79) と評していたのである²⁷⁾。

2) キーツが与えた怠惰の意義

ところで、怠惰の意義はキーツ以前にも、上記引用の手紙でも言及されていたトムソン (James Thomson, 1700-48) や、その当時人気を博していた定期刊行物*The Idler*誌 (1758-1760)²⁸⁾ でも示されてもいた。怠惰は勤勉と対比され、勤勉にまして豊かな価値を持つものとして賞賛されていたのである。

トムソンは『怠惰の城』(*The Castle of the Indolence*, 1748) で、怠惰の城は夢のような地にあり、そこでは全ての感覚が贅沢であるが無気力にする喜びに浸っていた。城の主は旅人を誘ってその喜びによって旅人の力を破壊し希望を挫いていたのである。怠惰は常に勤勉との対比において賞賛されていたのであった。

そのような怠惰はキーツ自身も良いものだとされていて、上記で言及した手紙 (3月19日付) においてトムソンの『怠惰の城』を読みたいと述べていたことからもうかがえる。心身ともに無為の状態であるときに、トムソンの詩を渴望していた。それ以前にもレノルズ (John Hamilton Reynolds, 1794-1852) 宛の手紙 (1818年2月19日付) において、無為ではあるが詩か散文を読んで味わい尽くして知的に成熟する過程を “what delicious diligent indolence” (「なんと甘美で勤勉な怠惰か」 I. 231) と評していた。さらに、これ以後にも、ウッドハウス (Richard Woodhouse, 1788-1834) 宛の手紙 (1819年9月21、22日付) では、“I am an otiosus-peroccupatus [sic] Man.” (Ⅱ. 175. おそらく「私は怠惰にすっかり占められている人間だ」という意味²⁹⁾) と述べている。特に何をするわけでもないが、好きな詩を読んだりすることを望ましい怠惰として述べていたのである。かつては一部の特権階級の人だけに許されていた、そして現代の、労働から自由になれる余暇の享受についての考え方に通じる態度を肯定していたと言える。

なお、この “diligent Indolence” をゴエルニヒトはキーツの読者論を説く鍵として論じている³⁰⁾。

この詩が書かれたとされる2日前 (弟夫妻宛の手紙、1819年3月17日付) にもこのような楽しい怠惰に言及していた³¹⁾。キーツは怠惰を「安楽な怠惰」と「楽でな

い怠惰」に二分して考えていた。楽しくない他者に囲まれて何もすることもないというような怠惰は耐えられないとしている一方で、一人でいて無為であってもいろいろな思索を巡らせることができれば、楽しいものであるとして肯定している。社会的な要請に応えるよりも、たとえば読書や思索などのように自分のしたいことをすることを、楽しい怠惰だと考えていたのである。正に、社会的な責務から解放されて時間を自由に使える現代的な余暇の価値を意識させる発言であると言えよう。

この二種類の怠惰について、ゴエルニヒトの説明はこうである³²⁾。無為の状態は時として思索などの時間にもなることから、その場合受け身的な状態であるとしても最終的には創造性に結びつくものであるという。他方、思索も連想もない場合、創造性が生まれてこない生気のない心身ともに無気力な状態であるというのである。

ところが、「怠惰に寄せるオード」で称えられている怠惰はこのような楽しい意味だけにとどまらな思考えられる³³⁾。愛と野心と詩的想像力の幻影が織りなす内的なドラマを退けて、身体的にも精神的にも無為であることに耽溺しようとしているからである。無為であってもさまざまに思いを巡らせるのではなく、キーツがこのオードでよしとしているのは身体的なもの (手紙の説明では打撲からの回復) が優るような怠惰なのである。ゴエルニヒトも怠惰には上記二種類と異なる第三の怠惰があると示唆していた³⁴⁾。

3) キーツが示した怠惰の今日的意義

*OED*の ‘indolence’ の項には、病理学では「無痛」「腫れの痛みがないこと」という意味が挙げられていることに改めて気付かされる。

この意味を上で言及したオード創作時の状態を記した手紙 (Ⅱ. 77) と照らし合わせると、キーツは脳の線維組織も含めた身体全体がリラックスし、快楽にも誘われない苦痛も我慢できない状態ではないと述べて、その状態を幸福で、身体が精神を圧倒する例であると評していた。この詩における怠惰も上で示したように “The ... cloud of ... indolence / Benumbed my eyes; ... / Pain had no sting” と描かれていたので、同じく痛みがない状態に近いものを表していると言えよう。

そして、詩人はこのような怠惰の境地を次のように描

いている。

My sleep had been embroider'd with dim dreams;
 My soul had been a lawn besprinkled o'er
 With flowers, and stirring shades, and baffled beams:
 The morn was clouded, but no shower fell,
 Though in her lids hung the sweet tears of May;
 The open casement press'd a new-leaved vine,
 Let in the budding warmth and throstle's lay;
 私の眠りはかすかな夢で縫い取りされていた。
 私の魂は花々や揺れ動く影や
 屈折した光線がまき散らされる芝生だった。
 朝は曇っていたが雨は降らなかった。
 その瞼には五月の美しい涙がためられていたが。
 開かれた窓は新緑の蔓を押しつけ、
 新芽の温かさやウタツグミの歌を入れた。(ll. 42-48)

そして、この怠惰の状態を次のようにもうたっていたのである。

Ye cannot raise
 My head cool-bedded in the flowery grass:
 あなたたちは、花咲く草地に
 冷たく横たえている私の頭を起こせない。(ll. 51-52)

眠りは夢で飾られ、魂も花や光と影が差す芝生に例えられていることから、健やかな眠りと安らかな魂がうかがえる。また、季節も5月で、曇り空とはいえ春告げ鳥であるウタツグミ³⁵⁾のさえずりと新緑の温もりと芳しさに満ちている。

春の訪れの喜びに浸りながら頭を花咲く芝生にひんやりと心地よく休ませている。この意味においてこの怠惰は身体的なものである。また、そのように身体がやすらっているときに、春の雨が降りそうで降らない曇り空や、ウタツグミの囀りや新芽やそれをもたらす温もりなどにその意識が向かいその喜びに浸っている。この意味においては、怠惰は、身体と精神が対立的な関係にあるのではなく両者が一体になっているという意味で精神的なものだともいえるかもしれない。さらに、春の雨の降りそうで降らない時間は短いものであり、春告げ鳥のウタツ

グミの美しい歌声もひと時のことであり、さらには、新緑が芽吹くのも春の一瞬の出来事である。言い換えれば、花も鳥もいつまでもそこにあるわけではないので、束の間のかけがえのない喜びと心地よさに浸ることが怠惰がもたらすものとして讃えられていたと言えよう。

ここで描かれている怠惰は、前日にクリケットのバットが顔にあたり、眼を腫らし、黒あざとなるほどの打撃を受けたので、その傷から回復し、元気を取り戻すために、健やかな環境で打撃を受けた頭部を冷やししながら休むという怠惰ということになる。いわば、この怠惰は身体的であるが、精神的な意味ももつといえよう。

頭部に打撃を受けた場合、動かさずに冷やすことが第一にとられる方法である。この意味において、怠惰は身体的だと言える。今から見れば、キーツが賞賛した怠惰は、傷ついた心身が回復する³⁶⁾のために必要なものであろう。

キーツが称賛している怠惰は、外的・社会的なものが入り込まない個人的な内的・身体的・精神的な時間の中にある。これは「起きている時間」から「詩人として必要な時間」と「生活に必要な時間」を引いた残りの、キーツが自由に使える時間でもある。今日の意味では、時間を自分の好きに使える自由時間・レクリエーションの時間、あるいは何にも使わない自由時間・余暇に相当するだろう。キーツにとって、詩人でありまた詩人であろうと日々努力する詩人、さらにファニーや家族を愛する愛情深い若者というような、いわば社会的な役割を果たさないでよい境地を称賛していたといえる。怠惰には以上のような重要な意味を有していることが示唆されているので、このオードはもっと評価されるべきものだと思う。

なお、この詩が書かれたほぼ60年後に、マルクスの娘婿で、フランス労働党の創設に携わったラファルグ(Paul Lafargue, 1842-1911)が、『怠ける権利』(*Le droit à la paresse*, 1883)³⁷⁾において「余暇権」についての先駆的な思想を展開した。この考え方は、後に労働者のストライキ権や労働時間短縮とレクリエーション環境の整備が進められていったのである。さらに今日では、障害者などが障害や病気などの状態の悪化を防ぐために、あるいは重度の障害があり勤労が不可能な場合に、あえて勤労を避けることができる権利や、他者から勤労

を強要されることを拒否する権利である「働かない権利」として結実される。キーツが称えた怠惰は、当時は身体的・精神的で個人的な価値しか持たないものであったかもしれない。だが、彼が目を向けた怠惰の価値は、後に

社会的に重要な価値をもつものに発展していく可能性を秘めていたという点でも、このオードは大きな意味をもつものだったと結論できよう。

注

- 1) 'Ode to Psyche', 'Ode to a Nightingale', 'Ode on a Grecian Urn', 'Ode on Melancholy', 'To Autumn'.
- 2) W. Jackson Bate, *John Keats*, The Belknap Press of Harvard University Press, 1978, p.528.
- 3) William B. Ober, 'Drowsed with the Fume of Poppies: Opium and John Keats', *Bulletin of the New York Academy of Medicine*, 44 (1968), pp.870-872.
- 4) *Lamia, Isabella, The Eve of St. Agnes, and other Poems* (1820)
- 5) "a sort of temper indolent and supremely careless" in *The Letters of John Keats 1814-1821*, ed. by Hyder Edward Rollins, Harvard Univ. Press, 1976, II. 78. キーツの手紙の引用はこのテキストからし、本文中に巻数と頁数のみ記す。
- 6) II. 116.
- 7) Andrew Motion, *John Keats*, Faber & Faber, 1997, p.359.
- 8) *Ibid.*, p.403.
- 9) *John Keats: The Complete Poems*, ed. by Miriam Allott, London: Longman, 1972, p.544. キーツの詩の引用はこのテキストからし、本文中に行数のみ記す。
- 10) Motion, p.474.
- 11) なお 'my idle sprite' は古風な表現であるが、同年4月に書いた 'As Hermes once' でも同じ表現を用いている。
- 12) 「野の花がどのように育つのか、注意してみなさい。働きもせず、紡ぎもしない。」新共同訳
- 13) 「野の花がどのように育つのかを考えてみなさい。働きもせず、紡ぎもしない。」新共同訳
- 14) "The herbs and flowers of the field have their being, nourishment, exquisite flavors, and beautiful hues from God himself." Adam Clarke's Commentary on the Bible Online. <<http://www.studydrive.org/com/acc/view.cgi?bk=39&ch=6>>
- 15) seven deadly sinsとしては、indolenceより sloth という語が用いられることが多い。
- 16) ジョン・A. ハードン (編)、A. ジンマーマン (監修) (浜 寛五郎 訳)『現代カトリック事典』エンデルレ書店／ヘルデル代理店、昭和57年。「罪源」の項。
- 17) "Opposite to exercise is idleness (the badge of gentry) or want of exercise, the bane of body and mind, the nurse of naughtiness, stepmother of discipline, the chief author of all mischief, one of the seven deadly sins, and a sole cause of this and many other maladies, the devil's cushion, as Gualter calls it, his pillow and chief reposal." *The Anatomy of Melancholy What it is, with all the kinds, causes, symptoms, prognosticks & severall cures of it*, ed. with an Introduction by Holbrook Jackson, Vintage Books, 1977, p.242.
- 18) 山内眞 (監修)『新共同訳新約聖書略解』日本基督教団出版局、2000年、42頁。

19) 1819年2月14日－5月3日ジョージ夫妻宛の手紙。

また、弟トム（Thomas）が前年の1818年に肺結核を発症し、キーツは彼の臨終の12月まで看病し続けたので、そのときに感染し、1818年はその病症の寛解と進行を経験しながら、1820年2月3日の咯血に至ったのだと考えられている。なお、キーツが受けた結核治療については次の文献に簡潔にまとめられている。福田真人『結核という文化』中央公論社、2001年、92-98頁。ただし、ラファエル前派の画家ホルマン・ハント（William Holman Hunt, 1827-1910）をキーツの友人とする誤りがある（同書、10頁）。

20) 他に「咳、痰、微熱、胸痛、倦怠感、息切れ、食欲不振、体重減少、血痰、咯血など」の自覚症状があるという。

21) 「アパシーの原因となる疾患としては……大きく分けて①脳の局所性障害、②認知症、③精神疾患があり、前2者が神経内科学の対象疾患となる。」山口修平「アパシー（意欲障害）とは——神経内科の立場から——」、小林祥泰（編）『脳疾患によるアパシー（意欲障害）の臨床』新興医学出版社、2008年、3頁。

「Alexopoulosによる血管性うつ状態の定義では脳血管性障害、高齢発症などの基本的特徴の他に二次的特徴として①執行機能の障害に局限しない認知機能障害の存在（計画力、企画力、持続力、抽象力）、②精神運動制止、③罪業感などの抑うつ思考の乏しさ、④病識欠如、⑤無力感、⑥感情障害家族歴がないこと」という。小林祥泰「脳血管障害におけるアパシー（意欲障害）」、同書、p.62.

また、外傷性脳損傷によってもアパシー（意欲障害）が生じることもあるという。橋本学、岡崎哲也、蜂須賀研二「外傷性脳損傷におけるアパシー（意欲障害）」、同書、93-95頁。

22) 野村総一郎『内科医のためのうつ病診療』医学書院、1998年、19-20頁。また、脳卒中のケースでこのような症状があらわれることもあるという。濱聖司「脳卒中後のうつと意識低下」『週刊医学界新聞』第2871号、2010年3月15日、<http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA02871_03>

22) 小林祥泰「脳血管障害におけるアパシー（意欲障害）」（小林祥泰、編）『脳疾患によるアパシー（意欲障害）の臨床』新興医学出版社、2008年、p.61.

23) オーバーは、目元にけがをした後に眠りすぎるのは普通ではなく、また苦痛や快楽の通常の刺激に対する無関心さは、ヒル治療の副作用とは考えられず、アヘンチンキを摂取したことによるものだと考えている。‘Drowsed with the Fume of Poppies’, p.872.

24) Yesterday I got a black eye – the first time I took a Cr|icket|bat – Brown who is always one’s friend in a disaster|appl|ied a lee|ch to|the eyelid, and there is no infla|mm|ation this morning though the ball hit me dir|ect|ly on the sight – ‘t was a white ball – I am glad it was not a clout – This is the second black eye I have had since leaving school – during all my|scho|ol days I never had one at all – we must e|a|t a peck before we die – This morning I am in a sort of temper indolent and supremely careless: (II. 78.)

25) ヒル治療は、紀元前2世紀からあり、頭痛から腹部の不調までの様々な疾患に用いられ、18世紀から19世紀半ばにはイギリスやフランスなどではよく用いられた民間治療法であり、19世紀半ばにはアメリカに輸出もされ、医療用の蛭は絶滅の恐れもあったと伝えられている。19世紀末には廃れ始めたが、この療法は今日、精神的にも身体的にも蛭に対してアレルギーのない患者のうっ血など静脈の機能不全に関わる治療法として再評価の兆しがある。AM. Abdelgabrar MRCP, and BK Bhowmick MD, FRCP, ‘The Return of the Leech,’ *International Journal of Clinical Practice* 57(2), 2003, pp.103-105.

Mark D. Wells, MD., Ralph T. Manktelow, MD., J. Brian Boyd, M. D., and Vaughan Bowen, M.D., M. B., CH. B., ‘The Medical Leech: an Old Treatment Revisited,’ *Microsurgery* 14(3), pp.183-186.

Ali R. Elyassi, DDS, Jayson Terres, DDS, MD and Henry H. Rowshan, DDS, Fort Hood and Tyler, Texas, and Fort Irwin, California, ‘Medicinal leech therapy on head and neck patients: a review of literature and proposed protocol’, *Oral surgery, oral medicine, oral pathology, oral radiology*, July, 20. 2012 (article in

- press).
- 26) I long after a stanza or two of Thomson's Castle of Indolence – I long after a stanza or two of Thomson's Castle of indolence – My passions are all asleep from my having slumbered till nearly eleven and weakened the animal fibre all over me to a delightful sensation about three degrees on this side of faintness – if I had teeth of pearl and the breath of lilies I should call it langour – but I am – especially as I have a black eye – I must call it Laziness. In this state of effeminacy the fibres of the brain are relaxed in common with the rest of the body, and to such a happy degree that pleasure has no show of enticement and pain no unbearable frown. (II. 78.)
- 27) この後に続けて、受け取った手紙によって知った、友人ハズラム (William Haslam, 1795-1851) の世事の不幸 (父親の危篤) について語られる。
- 28) Samuel Johnson (1709-84) は、創刊号で怠惰は罪ではなく、すべての人間の欲求であると述べていた。
- 29) ロリンズは “a leisurely-terribly-busy man” と注釈している。(II. 194) ただシラテン語preoccupatus (心ここにはない) の誤字・異字の可能性が考えられるかもしれない。
- 30) “diligent Indolence” を “far from being only passive and receptive (indolent), as Locke would have it, the reader's response is active and creative (diligent) in a way that makes it very similar to the writer's original creativi” であると評した。Donald G. Goellnicht, ‘Keats on Reading “Delicious Diligent Indolence”’, *Journal of English and Germanic Philology*, 88(2) 1989, pp.195-196.
- 31) “On sunday I went to Davenports' were I dined – and had a nap. I cannot bare [sic] a day anihilated [sic] in that manner – there is a great difference between an easy and an uneasy indolence – An indolent day – fill'd with speculations even of an unpleasant colour – is bearable and even pleasant alone – when one's thoughts cannot find out any th[i]ng better in the world; and experience has told us that locomotion is no change; but to have nothing to do, and to be surrounded with unpleasant human identities; who press upon one just enough to prevent one getting into a lazy position; and not enough to interest or rouse one; is a capital punishment of a capital crime; for is not giving up, through goodnature, one's time to people who have no light and shade a capital crime?” (II. 77.) (下線は論者)
- 32) Donald C. Goellnicht, *The Poet-Physician: Keats and Medical Science*, Univ. of Pittsburgh Press, 1984, p. 204.
- 33) ロリンズは、このような心楽しい怠惰については、ワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) の1817年に書かれ1820年に出版された ‘Vernal Ode’ (「春のオード」) の “pleasing indolence” (l. 86) との関連を指摘している。(II. 78.)
- 34) この第三の怠惰について、ゴエルニヒトもオーバー (注3) と同じく痛みを軽減するために用いたアヘンの影響であると考えていた。Goellnicht, *The Poet-Physician*, p.205.
- 35) Wordsworthも ‘Table Turned’ で “And hark! how blithe the throstle sings!” とウタツグミの楽しいさえずりをうたっている。
- 36) ちなみにrecreationの語源はラテン語recreareで、意味は再創造、壊れたものがつくり直されること、人が病気から回復すること、課業の疲労をいやして元気を取り戻すこと。
- 37) ラファエルは、キーツが題辞に引用した聖書の一節を「怠惰」を説いたものだと考えている。『怠ける権利』(田淵晉也訳) 平凡社、2008年、18頁。おそらく、この一節は一般的には怠惰の勧めとして受け止められることが多かったのかもしれない。

A Drama of the Body Overpowering the Mind in Keats's 'Ode on Indolence'

ANABUKI Akiko

Abstract

This paper discusses several points in Keats's 'Ode on Indolence'. First, we wonder why Keats praises indolence, not ambition, love or poesy which are valuable to him and discuss Keats's meaning of indolence. Second, we examine the biblical interpretation of *Matthew* 6 : 28 and *Luke* 12 : 27 which is used as the epigraph. Keats's indolence can be interpreted as release from worries and anxieties of ambition, love or poesy. Third, we point out Keats's indolence is different from what James Thomson and others praised. It places a premium on physical restoration and on his realization of the brevity of life. Finally, we conclude Keats's attitude toward indolence is valuable because it forecasts laborers' rights to strike, or the physically-disabled or invalid' refusal to work.

Key words : Keats ; indolence ; diligence ; physicality ; *Mathew*.